

英語の場所句倒置構文について

重松, 諒爾
九州大学人文科学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/20047>

出版情報 : 九大英文学. 52, pp.151-170, 2010-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

英語の場所句倒置構文について*

重松 諒爾

1. はじめに

言語の中には主語-動詞-目的語という語順をとる SVO 言語があり、英語もその一つに分類される。語順は我々が人間言語の本質を見極めようとする際に重要な手掛かりとなる。特に、ある言語において通常の語順とは異なる語順をとるような特殊な構文がある場合、最も中心的な形をとる規範文とそのような特殊な構文を比較研究することでその大きな助けとなると考えられる。

英語のそうした特殊な構文の一つに(1)に示されるような場所句倒置構文がある。

(1) a. A lamp was in the corner.

b. In the corner was a lamp.

(Bresnan (1994:75))

(1a)は規範文であり、主語名詞句、動詞、そして場所句 PP が後続する形をとっている。(1b)は場所句倒置文であり、場所句 *in the corner* が見かけ上主語位置を占め、動詞と意味上の主語名詞句が後続している。

本稿は、こうした英語の場所句倒置構文の文法的特徴を場所句倒置の統語的派生を分析することにより説明することを目標とする。

2. 場所句倒置構文の中心の特徴

英語の場所句倒置構文は特殊な語順を示す。次の(2)の文は全て規範文であり、(3)の文は全て場所句倒置文である。

- (2) a. The baby carriage rolled down the hill.
- b. My mother's best friend strolled out of the house.
- c. My friend Rose was sitting among the guests.
- (3) a. Down the hill rolled the baby carriage.
- b. Out of the house strolled my mother's best friend. (Coopmans (1989:729))
- c. Among the guests was sitting my friend Rose. (Bresnan (1994:78))

(3)に示される場所句倒置文は、規範文と比較してみると主語名詞句と場所句 PP を入れ替えたような語順を示している。具体的に言えば、場所句倒置文では文頭位置に場所句 PP があり、その後に動詞、そして意味上の主語 DP が続いている。この語順は次の(4)に示されるような前置詞句だけを文頭位置へ移動させたものとは異なる。

- (4) a. Down the hill the baby carriage rolled.
- b. Through the hole the little rat ran.
- c. Into the room John walked. (Coopmans (1989:730))

場所句倒置文では、動詞は文頭位置を占める場所句 PP とは数の一致を示さず、動詞に後続する意味上の主語 DP との一致を示す。

- (5) a. Two children were/*was found in the swamp.
- b. In the swamp were/*was found two children. (Bresnan (1994:95))
- c. Out of the embedded clause and into the matrix object position moves/*move the ECMed subject.

(5a)のような規範文では文頭位置を占める主語 DP が複数の場合動詞は複数的一致を見せる。一方で(5b)のような場所句倒置文の場合、動詞は文頭位置にある場所句 PP とではなく動詞に後続する DP の数に一致する。(5c)のように前置詞句が文頭位置で等位接続されている場合であってもこのことは同様である。

このような一致は(6)に示されるように長距離においても見られる。

- (6) a. ?On the bed seem/*seems to lie two cats.
 b. In the portrait of John seem/*seems to have appeared some dark spots.

これらの事実から、場所句倒置文の動詞は義務的に動詞に後続する DP に一致すると考えられる。

また、場所句倒置文に現れる動詞は(7)に例示されているように主語に動作主をとらないものに限られる。

- (7) a. Onto the ground had fallen a few leaves.
 b. *Onto the ground had spit a sailor.

一般に、場所句倒置文に現れる動詞は非対格動詞の一部であると言われており、(7a)のように、動作主を主語に取らず意図的な行為も表さない。非能格動詞が場所句倒置文に現れると、(7b)のように非文法的となる。

さらに、(8)のように他動詞も場所句倒置文には現れることができない。

- (8) a. My friend Rose seated my mother among the guests of honor.
 b. *Among the guests of honor seated my mother my friend Rose.
 c. *Among the guests of honor seated my friend Rose my mother.

(8a)のような他動詞構文に対応する場所句倒置の語順は、動詞の後ろに目的語-主語の語順で続く場合(=8b))も、主語-目的語の語順で続く場合(=8c))も、どちらも非文法的である。従って、場所句倒置文の動詞には非能格性と他動

性に関する二つの制限が存在するということになる。このような分布上の事実は場所句倒置文と動詞の種類による派生の統語的な側面から説明される。

また、(9)のように場所句倒置文は疑問文形成に際して Do 支持を起こさない。

- (9) a. On the wall hung a portrait of the artist.
- b. On which wall hung a portrait of the artist?
- c. *On which wall did hang a portrait of the artist? (Bresnan (1994:102))

(9a)の場所句倒置文の場所句を wh 化して wh 疑問文にする場合、(9b)のように Do 支持を起こさない形でなければならない。(9c)のように Do 支持を起こすと非文法的となる。

場所句倒置文の生起する環境について、場所句倒置文は非定形の埋め込み節では起こらないことが知られている。

- (10) a. I expect that on this wall will be hung a picture of Leonard Pabbs.
- b. *I expect for on this wall to be hung a picture of Leonard Pabbs.
- c. *I expect on this wall to be hung a picture of Leonard Pabbs. (ibid.:108)

(10a)のように、定形の埋め込み節には場所句倒置が生じるが、(10b,c)のように、非定形の埋め込み節で場所句倒置を起こした例は非文法的である。この点に関しては、場所句倒置文の場所句 PP は話題化を適用した文における話題要素と同様の性質を示していると考えられる。(11)は話題化を適用した文の例である。

- (11) a. To Mary, Sam gave a book.
- b. *John believes to Mary, Sam to have given a book.
- c. *John believes Sam to Mary, to have given a book. (Nishihara (1999:389))
- d. John says that to Mary, Sam gave a book.

(11b,c)から分かるように、話題要素は不定詞節の主語に先行するか後続するかに関係なく不定詞節に生じることができないが、(11d)のように定形の埋め込み節には生じることができる。

上述のように場所句倒置は非定形の埋め込み節では起こらないが、次の(12)のように繰り上げ構文の形をとることができる。

- (12) a. Over my windowsill seems to have crawled an entire army of ants.
 b. On that hill appears to be located a cathedral. (Bresnan (1994: 96))

(12)の例は見かけ上主語位置を場所句が占めており、埋め込み節の動詞の後ろに意味上の主語 DP が続いている。

さらに、場所句倒置文は解釈に関わる文法現象として以下のような性質を示す。まず弱交差現象(WCO 効果)に関する(13)の例を見る。

- (13) *Who_i does his_i mother like?

(13)の文は wh 疑問文であるが、同一指標を持つ要素が同一解釈を受けることはできない。このような効果は wh 要素が解釈に関わる領域への A' 移動に際して束縛代名詞を越えることと関連している。同様の効果は次の(14)に示す話題化文にも見られる。

- (14) *Into every dog_i's cage its_i owner was looking.

(14)では文末位置に生じた場所句が話題化に際して解釈へ関わる領域へ前置されており、(13)の例と同様に同一指標を持つ要素は同一解釈が受けられない。しかしこの弱交差現象は場所句倒置文にはみられない。

- (15) Into every dog_i's cage was looking its_i owner.

(15)の例は場所句倒置を含む文で、(14)の話題化の例と同様に文頭位置を場所

句が占めているが、(14)とは異なり同一指標を持つ要素の同一解釈が可能である。この点に関しては、場所句倒置文の場所句と話題化文の話題要素は異なる振る舞いを示すと言える。

また、数量詞の作用域に関して、場所句倒置文の場所句内にある数量詞は義務的に広い作用域を持つことが指摘されている。(16a)は規范文、(16b)は場所句倒置文である。

- (16) a. Some letter was lying in every pigeonhole. (some>every, every>some)
b. In some pigeonhole was lying every letter. (some>every, *every>some)
(Den Dikken (2006:132))

(16a)の規范文では、数量詞 *some* が *every* よりも広い作用域を持つ解釈と狭い作用域を持つ解釈の二通りが可能である。一方で(16b)の場所句倒置文では解釈は一通りしかなく、場所句内にある数量詞 *some* が *every* よりも広い作用域を持つ解釈を受ける。

最後に、場所句倒置文は再構築効果に関して以下のような特性を示す。その提示文としての性格から束縛に関する全ての可能性を検証するのは難しいが、たとえば次の(17)のような例を挙げることができる。

- (17) a. ^{??}In the portrait of himself_i seem to John_i to have appeared some dark spots.
b. [?]In the portrait of John seem to have appeared some dark spots.
c. Next to the/*its_i cavern could be seen every/no dragon_i. (Rezac (2006:687))

(17a)は場所句内部に照応形の代名詞 *himself* を持ち、その先行詞は下位の前置詞句 *to John* の内部にある。この(17a)の文の容認性は極めて低い。これに対して、場所句内部に指示表現である *John* を持つ(17b)の例では文法性が向上している。また、(17c)のように、場所句が内部に束縛代名詞を持つ場合、その束縛代名詞は動詞の後ろの名詞句に束縛される解釈をとることができない。

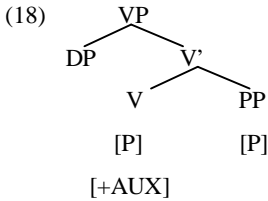
ここまで見たような場所句倒置文の文法的特徴は場所句倒置文の派生に関

する統語的な側面から導かれる。次章では代表的な先行研究を概観する。

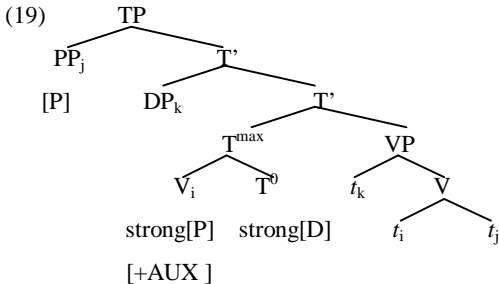
3. 先行研究

3.1 中島 (1996)

中島 (1996)は場所句倒置文の場所句 PP が最終的に TP 指定部位置を占めるという分析をしている。中島は次の(18)に示すような VP を元に派生が進行すると想定している。



中島は場所句倒置文の V と PP に[P]素性を仮定し、同時に V が T によって照合されなければならない[+AUX]素性を持つと仮定している。派生に T が入ると V-to-T の主要部移動により V の[+AUX]素性が照合されるが、この際に T の持つ強[D]素性と V の[P]素性が関連付けられることで、V の[P]素性が随意的に強素性になる。この強[P]素性は前置詞句の顕在的な移動を駆動し、同時に T の強[D]素性が DP の顕在的な移動を駆動する。その結果派生は次の(19)の段階まで進行する。



最終的に PF の要因により DP が右方移動し、場所句倒置文の語順が派生する。

この分析の一つの問題点は非定形節の環境における場所句倒置文の派生を捉えられないことである。中島は非定形節の場合最初の V-to-T の主要部移動がないと想定し、続く PP の移動そのものが起こらないと説明しており、これによって(20a,b)=(10b,c))のように ECM 補部に場所句倒置が生起不可能であることが捉えられる。

(20) a. *I expect for on this wall to be hung a picture of Leonard Pabbs.

b. *I expect on this wall to be hung a picture of Leonard Pabbs.

しかし、そのように想定する場合(21)=(12))のような文法的である繰上げ構文の例も ECM 構文と同様に非定形節を補部を取るため場所句が前置することがないと予測してしまう。

(21) a. Over my windowsill seems to have crawled an entire army of ants.

b. On that hill appears to be located a cathedral.

また、(22)=(16))の数量詞の作用域の問題に関して、LF での数量詞繰上げ(Quantifier Raising:QR)(May (1977))を想定する場合、場所句が TP 指定部位置を占めるとする中島の分析では場所句倒置文の解釈を説明することができない。

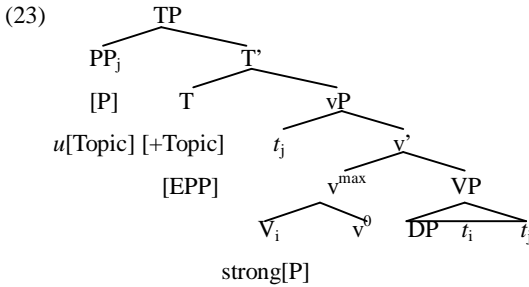
(22) a. Some letter was lying in every pigeonhole. (some>every, every>some)

b. In some pigeonhole was lying every letter. (some>every,*every>some)

QR は数量詞を TP 付加位置まで繰り上げるため、場所句が TP にあると考えると(22a)の規范文と(22b)の場所句倒置文は数量詞 every の QR によってどちらも二通りの解釈、つまり数量詞 some が広い作用域を持つ解釈と狭い作用域を持つ解釈を取ることができるはずである。しかし実際には(22b)の文は数量詞 some が広い解釈しか持たない。

3.2 Nishihara (1999)

Nishihara (1999)は上記の中島 (1996)の持つ問題点を解決するために VP-shell 分析を採用し、V-to-T 移動の代わりに V-to-v 移動を想定している。それによって非定形節であっても場所句 PP は TP 指定部位置までは移動できることになる。また、Nishihara は PP が解釈不可能な[Topic]素性を持つと想定しており、定形の T はその素性を照合できる能力のある[Topic]素性を持つと想定している。派生のその段階は次の(23)のようになる。



Nishihara は場所句倒置文の場合この上に Topic という機能投射が併合すると想定し、その主要部によって T の[+Topic]素性が牽引され、最終的にその Topic の[+Topic]素性によって場所句 PP が TopicP の指定部位置に移動する、としている。

この Nishihara の分析は中島が捉えられなかった非定形節の問題を正しく捉えることができる。この分析では場所句倒置文が ECM 補文に生起できないのは、非定形の T に[+Topic]素性がなく場所句 PP の解釈不可能な[Topic]素性が照合されないことが原因ということになる。そのため、繰上げ構文のように主節の T が定形で[+Topic]素性を持っていれば主節で最終的に解釈不可能素性の照合が行われ、派生が収束することが予測される。

しかし、(23)の段階で PP と T の間に[Topic]素性の照合関係が築かれていながら、その照合を行わずに[+Topic]素性が TopicP の主要部まで移動することを想定しているため、理論的に余剰性を孕んでいると言える。

また、場所句が動詞句内の位置から繰り上がるとすると前章の(17)で見た

再構築効果に関する例で見た文法性の差異を捉えられない。その例を(24)に繰り返す。

- (24) a. ^{??}In the portrait of himself_i seem to John_i to have appeared some dark spots.
b. [?]In the portrait of John seem to have appeared some dark spots.
c. Next to the/*its_i cavern could be seen every/no dragon_i.

Nishihara の分析では、(24a-c)の例はどれも同程度の文法性を持つことが予測される。

3.3 Coopmans (1989)

Coopmans (1989)はここまで見た分析とは異なり、場所句 PP は主語位置を経由せずに直接 C の領域に前置されるとしている。Coopmans は VP 内主語仮説をとらず、pro が V の外項として TP 指定部位置に基底生成すると想定している。その後 C の領域が派生に入ると場所句 PP は TP の指定部を経由することなく直接 C の領域に前置される。その派生を次の(25a,b)に示す。

- (25) a. [_{TP} pro T [_{VP} V DP PP]
b. [_{CP} PP_i [_{TP} pro T [_{VP} V DP t_i]

Coopmans はこの場所句 PP の移動がどのような要因によって駆動されるかについては言及していないが、Nishihara (1999)と同様に、解釈に関わる素性、たとえば[Topic]素性などがその駆動要因であると考えられる。

この分析の問題点は、場所句倒置文に WCO 効果が見られないことを説明できない点にある。WCO 効果に関する例を(26)に繰り返す。

- (26) a. *Who_i does his_i mother like?
b. Into every dog_i's cage was looking its_i owner.

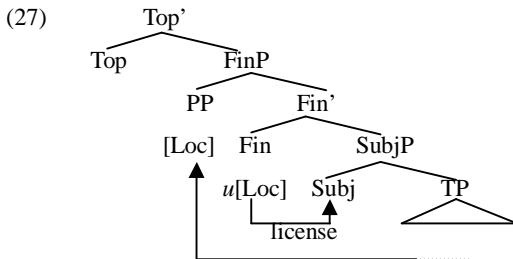
(26b)の場所句倒置文で PP が直接 C の領域に前置されるのであればその移動

は単一の A' 移動であり、その場合(26a)の wh 疑問文形成の例と同様に WCO 効果が見られることを予測してしまう。¹

また、Nishihara (1999)の分析と同様に再構築効果に関する文法性の差異についてもこの分析では捉える事ができない。

3.4 Rizzi and Shlonsky (2006)

Rizzi and Shlonsky (2006)(以下 R&S)は Coopmans (1989)と同様に、場所句 PP は主語位置を経由することなく前置されると述べており、そのメカニズムには Rizzi (1997)の split CP 分析を用いている。また、解釈に関わる位置へ移動した要素はその場から移動することができなくなるという Criterion Freezing を想定し、従来の T の EPP を Subject Criterion として読み替えることで、主語位置へ移動した要素はその場所に凍結すると想定している。R&S は、場所句倒置文でこの Subject Criterion を満たすのは場所句 PP ではなく、機能範疇 Fin の持つ解釈不可能な[Loc]素性であるとし、その間接的な Criterion の認可によって場所句 PP 自体は主語位置を経由せずに解釈に関わる位置へ前置されることができると述べている。従って、R&S の分析では場所句倒置文の主語位置(R&S の想定では[Spec, SubjP])には要素はないということになる。その派生は次の(27)に示される。



この分析の問題は非定形節では FinP がなく場所句 PP が前置されないということを想定しているため、中島 (1996)の分析と同様に場所句倒置文が ECM 補部に生起できないことは説明可能であるが、繰上げ構文として派生できることを捉えられないということである。

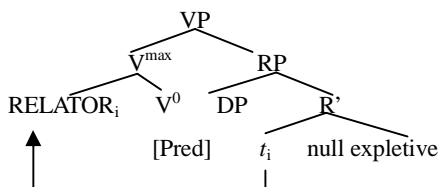
また、再構築効果に関する例の文法性の差異についてもこの分析では捉えられない。

4. 代案

ここでは前章で見た先行研究の問題点を克服できるような代案を提示する。まず den Dikken (2006)に倣い、場所句倒置文は小節構造を元に派生すると想定する。

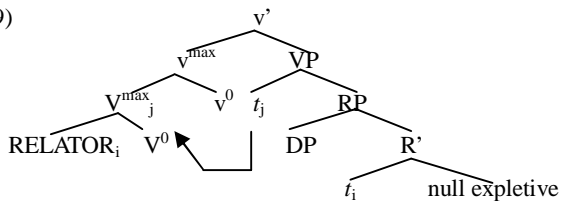
まず(28)に示すように小節構造を選択する V の主要部に小節構造の主要部が素性照合のために繰り返される。ここでは den Dikken の用語を借りて小節構造の主要部を RELATOR、その投射を RP とする。

(28)

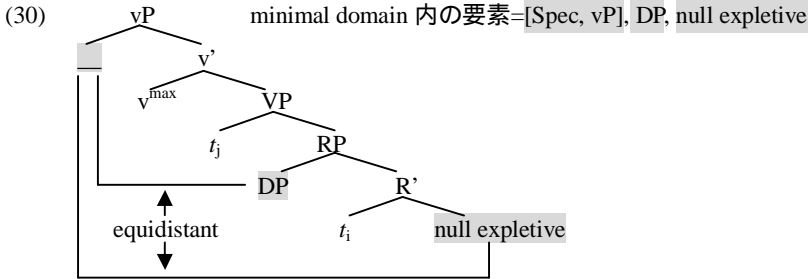


ここでは小節構造内部では意味上の主語 DP と関係付けられるのは空の虚辞であると想定する。また、次の段階で v が派生に入るが、この v は一般的な他動詞の v とは異なり、[EPP]素性は持つが指定部要素に agent を付与することがないと想定する。次の(29)は v が派生に入った後 V-to-v の主要部移動を起こした段階である。

(29)



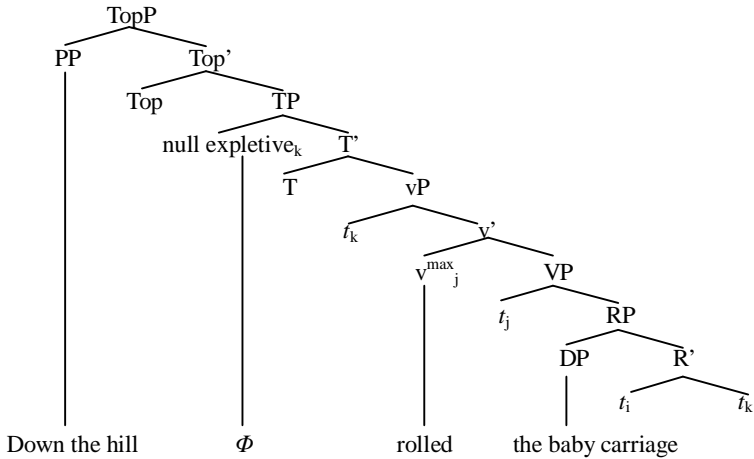
この主要部移動の結果、RP 内部から RELATOR が v まで移動し、主要部 RELATOR の最小領域(minimal domain)は RP の補部位置、RP の指定部位置、 vP の指定部位置を含むようになる。² この場合、RP 指定部位置から vP 指定部位置までと RP 補部位置から vP 指定部位置までは、どちらも同一の最小領域内の位置を基準としているため(30)に示すように等距離(equidistant)となる。



この等距離の概念によって、RP 補部位置の空の虚辞は v の[EPP]素性を照合するために DP を超えて vP の指定部位置へ移動できるようになる。最終的に T の[EPP]素性は、最も近い vP 指定部位置にある空の虚辞を探索し、T の素性は素性を持たない空の虚辞を乗り越えて RP 内部の DP を探索する。結果として空の虚辞が主語位置[Spec, TP]へ移動し、動詞は動詞に後続する DP との一致を示すようになる。

この空の虚辞は意味内容を欠くため、束縛代名詞に近い形で場所句 PP によって認可される必要があると考えられる。従って、ここでは Rizzi (1997) の split CP 分析を採用し、場所句 PP は解釈に関わるような[Topic]素性あるいは[Focus]素性を持って TopP あるいは FocP の指定部位置に基底生成し、その位置から空の虚辞を認可することを想定する。本分析による最終的な場所句倒置文の統語構造は次の(31)のようになる。(31)は場所句 PP が TopP に基底生成した場合を例示している。

(31)



この分析を用いて場所句倒置の動詞の制限を考察する。まず、小節構造に入った DP は agent の 役割を受け取ることができず、そのため動詞は動作主による意図的な行為を表すことはできないということが捉えられる。また、他動詞の場合主語 DP が vP の指定部に入ることによって v の[EPP]素性を照合し、等距離の概念に基づく RP 内からの繰り上げは起こらなくなる。この場合、T にとって最も近い要素は vP 指定部に併合した他動詞の主語 DP となり、T の[EPP]素性によって TP 指定部位置への移動を起こすことのできる要素は他動詞の主語 DP のみということになる。

また、場所句倒置文は次の(32)に再掲するように Do 支持を起こさない。これについては、本稿の分析ではその次の(33)に示すように、主語位置を占めるのは空の要素であるので T-to-Foc 移動を起こした T が PF で動詞に接辞添加するのを妨げないという説明が与えられる。

- (32) a. On the wall hung a portrait of the artist.
b. On which wall hung a portrait of the artist?
c. *On which wall did hang a portrait of the artist? (Bresnan (1994:102))

(33) $[_{\text{TopP}} \text{PP} [_{\text{FocP}} \text{T-Foc} [_{\text{TP}} \Phi_k [_{\text{VP}} t_k \text{V-V}_j [_{\text{VP}} t_j [_{\text{RP}} \text{DP } t_i t_k]$

PF における Affix hopping

さらに、ECM 補部のような非定形節は(34)に繰り返す例に見られるように話題要素も生起できない位置であり、TopP を含む C の領域を投射しないと考えられる。つまり、ECM 補部には場所句倒置文の場所句 PP が基底生成する位置がないということである。

- (34) a. To Mary, Sam gave a book.
- b. *John believes to Mary, Sam to have given a book.
- c. *John believes Sam to Mary, to have given a book.

一方で、繰り上げ構文の場合は(35)に示すように、実際に主節の TP 指定位置まで繰り上がるのは空の虚辞で、主節に投射した C の領域に場所句 PP が基底生成することで空の虚辞の認可が行われ文法的になると考えられる。

(35) $[_{\text{TopP}} \text{PP Top} [_{\text{TP}} \Phi_k \text{ T} [_{\text{VP}} \text{V} [_{\text{VP}} \text{V} [_{\text{TP}} t_k \text{ to}_i [_{\text{VP}} t_k \text{V-V}_j [_{\text{VP}} t_j [_{\text{RP}} \text{DP } t_i t_k]]]]]]]]]$

└──────────┘▲

license

また、解釈に関わる現象に関しては、本分析では場所句 PP は C の領域に基底生成するので WCO 効果が見られないことや数量詞の作用域に関する問題が説明できる。加えて、(36)に繰り返す再構築効果に関する例の文法性については、場所句 PP が C の領域に基底生成するため、場所句内部の要素がしかるべき要素に正しく束縛されないのが原因であると考えられる。

- (36) a. ??In the portrait of himself seemed to John to have appeared some dark spots.
- b. ?In the portrait of John seemed to have appeared some dark spots.
- c. Next to the/*its_i cavern could be seen every/no dragon_i.

在する全ての主要部を経由しなければならないという制限を課している。この主要部移動制約によって T は T-Foc 移動を起こす際に介在する全ての主要部を経由することになるが、Foc よりも下位に TopP が投射した場合、T は T-Top-Foc という主要部移動を行うことになる。このとき、Top と Foc は相反する性質を持つためこのような主要部移動を起こしてしまうと文は非文法的になると考えられる。

しかし、ここでもう一つの問題が生じる。場所句倒置文は(40)に示すように、Do 支持の有無に関係なく Yes/No 疑問文の形成ができない。

- (40) a. *Down the hill rolled the baby carriage?
 b. *Down the hill did roll the baby carriage?
 c. *Did down the hill roll the baby carriage?

仮に場所句 PP が Foc よりも上位の Top に基底生成する場合 Do 支持のない形で疑問文を形成することができるはずである。この問題に対する解決策としてここでは二つの可能性を提示する。一つに、空の虚辞の認可が場所句 PP の持つ解釈に関わるような素性、つまり[Topic]あるいは[Focus]などの素性によって行われており、下に介在する Foc が相対的最小性(Relativized Minimality)によって空の虚辞の認可を妨げてしまうということが考えられる。もう一つに、場所句倒置文の機能的な側面が疑問文形成を妨げている可能性が考えられる。(41)に示すように、実際には場所句倒置文と同じく提示文の一種である提示的 there 構文においても Yes/No 疑問文の形成が不可能である。

- (41) *Did there walk into the room a man?

久野・高見(2002, 2007)は提示文の機能的な適格性の条件として、話者あるいは話者が視点を置く人物が意味上の主語 DP の指示対象の存在/非存在を観察していることが必要であると述べている。そこでここでもその主張に則り、話者あるいは然るべき人物が述部の表す出来事を観察している必要があると想定する。もし事実の観察が行われているのであれば事実を観察していない

ことを表すような Yes/No 疑問文は形成できないことになる。

5. まとめ

本稿では場所句倒置構文の派生を統語的に捉えることを試みた。場所句倒置構文は小節構造を元に述部の倒置によって派生し、場所句 PP は C の領域に基底生成するというを想定した。また、述部から倒置するのは空の虚辞であり、C の領域にある場所句 PP によって認可されなければならないことを述べた。その分析を用いて場所句倒置文の主要な特性が説明できることを示した。また、疑問文形成に関するいくつかの問題は、相対的最小性による説明か、あるいは提示文に関する機能的な制約に基づく説明で解決できることを述べた。

註

* 本稿の作成に当たっては、西岡宣明先生より示唆に富む大変有益なご指摘を数多く頂いた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく本稿の内容や例文に関する不備は全て筆者の責任である。

¹ WCO 効果に関する代表的な説明としては、Koopman and Sportiche (1983)の一对一対応の原理(Bijection Principle)を用いたものがある。

A' 移動によって C の領域へ移動する要素は元位置に変項を残す。従って(i)のような例で同一指標を持つ要素が同一解釈を得るには、wh 演算子がお互いに C 統御関係のない束縛代名詞 his と wh の変項の二つの要素を束縛しなければならない。このような束縛関係は束縛子(binder)と変項(variable)の一对一対応を崩してしまっている。

(i) a. Who_i does his_i mother like?

b. Who_i does his_i mother like who_j?

Op variable variable

² ここでの主要部移動に伴う最小領域は以下の定義によって決定される。

(i) The domain $\delta(\text{CH})$ of $\text{CH}=(\alpha, t)$ is the set of categories included in the $\text{Max}(\alpha)$ that are

distinct from and do not contain a or t .

- (ii) The minimal domain $\delta_{\text{MIN}}(\text{CH})$ of $\text{CH}=(a,t)$ is the largest subset of S of $\delta(\text{CH})$ such that none of S 's members is dominated by any member of $\delta(\text{CH})$.

(Den Dikken (2006:114), Chomsky (1995:178, 299))

参考文献

- Bowers, John (1976) "On Surface Structure Grammatical Relations and the Structure-Preserving Hypothesis," *Linguistic Analysis* 2: 225-242.
- Bresnan, Joan (1994) "Locative Inversion and Architecture of Universal Grammar," *Language* 70: 72-131.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, Ed. Michael Kenstowicz.: 1-52. MIT Press, Cambridge, MA.
- Coopmans, Peter (1989) "Where stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language* 65: 728-751.
- Culicover, Peter W. and Robert D. Levin (1996) "Stylistic Inversion and the *That*-trace Effect in English: A Reconsideration," ms., Ohio State University, Ohio.
- Den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Holmberg, Anders (2000) "Scandinavian Stylistic Fronting: How Any Category Can Become an Expletive," *Linguistic Inquiry* 31: 445-484.
- Holmberg, Anders (2005) "Stylistic Fronting," *The Blackwell Companion to Syntax*, Eds. Martin Everaert and Henk van Riemsdijk.: 532-565. Blackwell Publishing, Blackwell.
- Kim, Jong Bok (2003) "English Locative Inversion: A Constraint-Based Approach," ms., Kyung Hee University, Seoul.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1983) "Variables and Bijection Principle", *The Linguistic Review* 2, 139-160.
- 久野暲・高見健一 (2002) 「There 構文と非対格性」『日英語の自動詞構文』研究社、東京

- 久野暉・高見健一 (2007) 「場所句倒置構文」の適格性条件」『英語の構文とその意味
生成文法と機能的構文論』開拓社、東京
- Levine, Robert D. (1989) "On Focus Inversion: Syntactic Valence and the Role of a SABCAT
List," *Linguistics* 27: 1013-1055.
- May, Robert C. (1977) "The Grammar of Quantification." Unpublished Ph. D. dissertation, MIT.
Reproduced by Garland (1991).
- 中島平三 (1996) 「多重主語構文としての場所句倒置」『英語青年』142 巻1号, 18-22.
- Nishihara, Toshiaki (1999) "On Locative Inversion and *There*-Construction," *English
Linguistics* 16: 381-404.
- Radford, Andrew (2004) *English Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Finite Structure of Left Periphery," *Elements of Grammar*, Ed.
Liliane Haegeman: 281-337. Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi and Ur Shlonsky (2006) "Satisfying the Subject Criterion by a Non Subject:
English Locative Inversion and Heavy NP Shift," *Phases of Interpretation*, Ed.
Mara Frascarelli: 341-361. Mouton de Gruyter, Berlin/Mouton de Gruyter,
115-160
- Rizzi, Luigi and Ur Shlonsky (2007) "Strategies of Subject Extraction," *Interfaces + Recursion
= Language? : Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, Eds. Hans
M. Gärtner and Uli Sauerland: 115-160. Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Stowell, Timothy (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.